

大山寺今昔 ワンポイント講座（四）

「大山寺阿弥陀堂の謎」

重要文化財の阿弥陀堂は、大山寺に残る最古の建造物です。その建築は、正面5間、奥行き5間で、平面はほぼ正方形に近く、四周に広縁をめぐらせ、屋根は柿葺きの宝形造で、簡素ながらも重厚なたたずまいを見せてています。

内部は、板張りの床の中央より後方に10本の丸柱を立てて内陣とし、そこに天承元年（1131年）に大仏師良円によつて作られた阿弥陀三尊像が安置されています。天井は内陣で折り上げて一段高くなっています。かつては、この内陣の周りを、「念佛」と呼ばれた修行が行われ、それを目的とした建物であることから、常行堂と呼ばれていました。



この堂には棟札写（宝永四年、1707年）が残つており、その記録から享禄二年（1529年）に洪水によつて流され、天文六年（1537年）から天文二十一年（1552年）にかけて古材を利用して現在の場所に再建されたことが知られています。それを裏付けるように、柱には傷跡や補修痕が多く認められます。また、一説には

この大堂であつたそうです。

これは少し大げさな感じもしますが、当時の阿弥陀堂はどんな姿で、どこに建つていたのか、興味は尽きません。また、現在の阿弥陀堂と阿弥陀三尊像についても、上記のことを繋ぎ合わせると、様々な推理ができると思います。

みなさんも、秋の夜長に阿弥陀堂と阿弥陀三尊像の来歴について、自分流の推論を立てて見られてはいかがでしょうか？

「大山の社寺見学会」を開きました!!

重要な要素になつています。

事もあります。それは、阿弥陀如来の台座裏の

小部屋の板壁には、弘安九年（1286年）に仏座修理をしたことを記した墨書銘や、外棟の小屋根の下には、永享六年（1434年）の「東南大破」墨書銘が残つていています。これらは、再建された年代よりもさらに古い年号のものです。他にも、柱が傷だらけになり、棟札写にも「洪水にて流失おわんぬ」と書かれているにも関わらず、本尊の阿弥陀三尊像には、被災の痕跡が認められません。このような不思議の中に、歴史の真実が秘められています。



しかし、棟札写の内容だけでは理解できない事もあります。それは、阿弥陀如来の台座裏の小部屋の板壁には、弘安九年（1286年）に仏座修理をしたことを記した墨書銘や、外棟の小屋根の下には、永享六年（1434年）の「東南大破」墨書銘が残つていています。これらは、再建された年代よりもさらに古い年号のものです。他にも、柱が傷だらけになり、棟札写にも「洪水にて流失おわんぬ」と書かれているにも関わらず、本尊の阿弥陀三尊像には、被災の痕跡が認められません。このような不思議の中に、歴史の真実が秘められています。

また、寺伝では、昔の阿弥陀堂は、「じょうご谷（常行谷のことか？）」にあり、24間四方の大山寺は、かつて一山三院四十二坊と呼ばれ、多くの堂社が建ち並んで、大いに栄えました。しかし、明治政府の神仏分离令と廢仏毀釈運動以降、お寺の多くが廃れてしまい、現在では9軒しか残つていません。その中には、大山寺阿弥陀堂や大神山神社奥宮など重要文化財に指定されている建物もいくつか含まれており、残されたこれら

の建造物が大山寺僧坊としての

価値を考えるうえで、とても貴重な要素になつています。

教育委員会では9月26日（土）に、これらの建物の価値や見どころについて、建築の専門の先生から説明をしていただく見学会を実施しました。講師に和田嘉賓さん（米子工業高等専門学校名譽教授）を迎え、洞明院、阿弥陀堂、大神山神社奥宮、理観院などを見学して歩きました。和田さんは、大山寺僧坊跡等調査委員会の専門委員の一人で、日頃から大山寺に残る建造物などの調査に協力頂いています。今回は、その成果も交えながら、建造物の見方や価値等についてお話を聞いていただきました。当日は天候も良く、一般には公開されていない建物の見学があつたことから、町内外から30名を越える参加者がありました。参加者からはたくさん質問があり、時間を延長するほど盛況な見学会となりました。